道徳ジャーナル

現代的な課題　グローバル特集号

120号

●21世紀　心の時代に
スペースデブリを除去し軌道を安全に
岡田　光信……1
●道徳授業　私の実践
・ICT×問いづくり×道徳
子どもたちの前のめりな姿から生まれる深い学び
渡邉　亮祐……4
・「自己を見つめる」児童の育成
南　善基……6
●SDGs×道徳
微力ではあるが無力ではないと信じて
佐藤　友莉菜……8
●どうなるこれからの道徳授業……10

21世紀心の時代に

スペースデブリを除去し軌道を安全に

株式会社アストロスケールホールディングス
創業者兼CEO
岡田（おかだ）　光信（みつのぶ）

危険なスペースデブリ

株式会社アストロスケールホールディングスは、主に「スペースデブリ」の除去に取り組んでいます。スペースデブリとは、いわゆる「宇宙にあるゴミ」で、近年大変な問題になっています。

人工衛星が世界で初めて打ち上げられたのが一九五七年。以来人工衛星は需要を増し、特に近年は、世界各国で増加が著しく、現在八千八百基以上の衛星が運用されています。地球環境の調査やインフラ整備などのために、衛星の役割はさらに増大し、今後も増えることは自明です。

それらは、さまざまな高さの軌道を回っていますが、周回しているのは稼働中の衛星だけではありません。運用の終わった衛星や、壊れた部品や破片などのデブリも大量に周回しています。これらも衛星の増加に伴い、急増中なのです。その数は、十センチメートル以上のものだけでも三万六千五百個程度。一センチメートル以上十センチメートル未満のもので、百万個程度存在すると想定されています。

人工衛星やデブリの飛行する速さは、低い軌道で秒速約八キロメートル、高い軌道で秒速約三キロメートルです。ぶつかり合った場合は、大事故になる危険をはらんでいるわけです。

2023年度に打ち上げが予定されているデブリ除去技術実証衛星「ADRAS-J」

アストロスケールは、こうした状況に対応するため、二〇一三年に立ち上がった民間企業です。スペースデブリを除去し、人工衛星をはじめとする宇宙機の軌道の安全を守る、さまざまなサービスを行おうと取り組んでいます。

スペースデブリ除去は自分の役目

私はもともと、宇宙に関してはまったくの素人でした。大学では農学部に所属し、遺伝学を研究しました。

大学院へ進学しようとしていましたが、折しも阪神淡路大震災が起こりました。震災により政策の重要性を痛感したこともあり、結局大学院への進学と同時に、公務員試験の勉強を始め、国家公務員になって大蔵省（当時）へ入りました。

それまで、特に何かをしたいわけではなく、これをしなければ、という使命感があったわけでもありません。小中学生の頃は、しばしば作文の課題で、自分の夢について書く機会がありました。私はその課題が嫌いでした。何を書いたらよいか分からず、その場で適当に思いついたことを書いていました。

留学先のアメリカでは毎週のように友人が起業しており、刺激を受けた私も公務員を辞め、コンサルティング会社を経て、事業会社を二社起こしました。

しかしいずれのキャリアも、つながりはなくバラバラで、友人からも「また違うことをやっているのか」と揶揄されつつ、私は四十歳を迎える直前まできていました。

いまだに「何者でもない」自分、やりたいことが見つからない自分に焦りを感じていた私に、転機が訪れました。元宇宙飛行士の毛利衛さんが、かつて私あてに書いてくれたメッセージを見つけたのです。

「岡田光信君　宇宙は君達の活躍するところ」という一言で、私が高校一年生の時、ＮＡＳＡのスペースキャンプ（宇宙飛行士ジュニアプログラム）に参加し、毛利さんからもらったものです。

たまたま応募して参加した私は、宇宙飛行士に憧れました。その時毛利さんの言った、宇宙飛行士という職業はないよ。物理学者だったり空軍パイロットだったり医師だったりといった、何かの専門家が宇宙飛行士になるんだよという言葉は印象に残っています。

宇宙。これが私にとってのキーワードになるかもしれない！　私は宇宙のホットトピックについて知るために、誰もが参加できる宇宙関係の学会を見つけて、さっそく行ってみたのです。

私はスペースデブリというものを知り、ドイツで開かれた専門の学会に参加しました。そして解決策がまだ見いだされていないことも分かり、その瞬間自分のすべきことはこれだと思いました。これまでの自分のキャリアの点と点が、すべてつながった感覚でした。

理系の研究の多くが、物事を突き詰めて法則を見つけるのに対し、農学は、生態系などの「調和」を考える側面が強いと言えます。私はスペースデブリに強い違和感を覚え、宇宙開発と宇宙環境が「調和していない」と感じました。これは農学を学んだからこそ感じたことだと思いました。

また、学会では「技術」と「ルール」との対立が見られました。せっかく技術があっても、使い方のルールができていないと実現は難しくなります。かといってルールに沿った技術を開発するというのは無理があります。宇宙には国境がないため、まとめる政府がなく、もめるのは当然かもしれません。

私は、ルール作りやグローバル経営には、政府や会社経営の経験が生かせると直感しました。スペースデブリ問題に取り組めるのは、まさに自分ではないだろうかと思いました。

私はその場で起業を決め、一週間後にはアストロスケールを立ち上げました。でも周りからは無理だと言われました。「スペースデブリ除去に市場はない」「技術がない」「巨額な費用がかかる」「事故時の保障は民間には不可能だ」と。

しかし私はむしろありがたいと思いました。競合他社がないなら、実現さえさせればいいわけです。なんてさわやかなことか。ワクワクしました。

信頼を得る

始めてみれば、確かに大変でした。壁は山ほどあ

りました。でも挫折と思うことはありませんでした。たとえばその一つが、資金調達。数十社回って、ほとんど断られました。応えてくれたのはごくわずかでした。精神的には相当しんどかったのですが、逆にそのわずかな会社は共感し、信頼してくれたわけです。私は希望を感じました。だから挫折と思わなかったのだと思います。

岡田光信さん（左から3番目）とアストロスケールの仲間たち

理解者を増やす、出資者を増やす、仲間を増やす。これが急務でした。そのためには、千の質問がきても、根拠を持った千の答えを返さねば信用してもらえません。猛勉強するしかありませんでした。

学会の論文集を、テーマごとにまとめなおして精読しました。論文に書かれたメールアドレスに連絡して海外へ出かけ、研究者たちに自分なりのスペースデブリ除去法の仮説をぶつけました。皆熱心に話を聞いてくれ、レクチャーまでしてくれて、大変勉強になりました。

努力は実を結び始め、宇宙技術、宇宙物理学に関しては研究者と普通に話せるようになりました。スペースデブリ除去衛星もイメージを思い描けるようになりました。そうなると、より具体的に動くことができるようになりました。

しかしピンチとは常に背中合わせでした。二〇一七年、微小なデブリを観測するための人工衛星を打ち上げました。短期間で根を詰めて準備したのですが、結果はロケットの打ち上げが失敗に終わり、衛星は大西洋に落下しました。

私はチームのメンバーがショックを受けていないか心配でした。急いでメンバーの元に戻ると、メンバーはむしろ私を心配してくれていました。アストロスケールは私だけの会社ではなく、メンバー全員の会社になっていたことに気付きました。

これからの宇宙開発には、スペースデブリ除去が必要不可欠。そのための課題は山積みですが明確です。だからこそ、私たちは失敗しても突き進めるのです。失敗の翌年の資金調達は当時の過去最高額でした。そして二〇二二年には世界初のデブリ除去実証を終え、二〇二三年現在、世界五か国で契約を獲得しています。

「宇宙のロードサービス」を目指して

必要なのは、スペースデブリの除去だけではありません。宇宙のロードサービスも必要です。車にも航空機にも船にも、アフターサービスがあります。燃料補給、点検、修理、廃棄。そうした一連の仕組みが、まだ宇宙にはありません。それを構築しないかぎり、宇宙開発は進められないでしょう。

私たちのゴールは、ひとまずＳＤＧｓと同じ二〇三〇年に置いています。実はＳＤＧｓの百六十九のターゲットの約四割は、成し遂げるために宇宙技術が必要なのです。宇宙の持続可能性を担保することが、ＳＤＧｓの０番目の目標である。そうした意識を持って取り組んでいます。

今の子どもたちは二十二世紀まで生きます。だめな地球を残すわけにはいきません。

解決の方法は多くはありません。私たち全員の思考と行動を変えるしかありません。思考はなかなか変えられないものですが、行動は変えられます。行動を変えるのは技術革新です。私たちは宇宙のロードサービスに向けた技術革新に全力を注ぎます。

（文／入澤宣幸　写真提供／アストロスケール）

道徳授業 私の実践

道徳×問いづくり×ICT

子どもたちの前のめりな姿から生まれる深い学び

静岡県御殿場市立
御殿場中学校教諭
渡邉　亮祐

はじめに

私は、子どもが自ら疑問を持ち、自分なりの学習プロセスで他者と協働しながら自らの疑問を解決することで、学びの実感を得る「子どもが前のめりに学ぶ授業」を目指しています。

このような授業を実現するために、生徒による問いづくりを中心とした学びを展開しており、実践をしていく中でICTの活用が有効であると感じています。

本稿では、道徳×問いづくり×ICTの授業実践について紹介します。

道徳における問いづくり

学習指導要領では、道徳授業において教師による意図を持った授業デザインが求められています。そのため、子どもたちから出る問いを中心とした道徳授業に疑問を持つ人もいるでしょう。

しかし、道徳的価値は一面的ではなくさまざまな側面があり、複数の価値が複雑に絡み合うことで、価値のよさ、価値の難しさが生まれています。

問いを重視した学習では多様な問いが生まれます。それにより、多様な価値観や立場から多面的・多角的に価値を見直すことができます。さまざまな側面から価値を考えられることに問いづくりのよさがあると考えています。

また私は、道徳授業の究極的な目標として、「他者の考えへの歩み寄りや共感」があると考えます。

クラスの仲間は多様で問いも多様です。それらとの出会いを通して、他者との違いを共感的に受け止めたり、その考えを受けて自分の考えを発展、深化させたりすることができます。この心の歩み寄り、自分の心の受け止め方の広がりこそが道徳授業における重要な学びであると思います。問いづくりでは、自然と多様な考えに触れます。これも問いづくりの価値の一つであると考えます。

授業実践

○**内容項目**　よりよく生きる喜び

○**教材名**　「足袋の季節」（『新・中学生の道徳明日への扉　2』学研）

○**本時の目標**　主人公の葛藤やお婆さんの行動に着目しながら、よりよく生きるためには何が必要なのかについて問いを持ち、それらについてさまざまな視点から話し合い、考えを交流する活動を通して、誰にでも後悔や心の弱さがあることに気付くと共に、自分なりの「よりよい生き方」について思いを深めることを目指す。

「よりよい生き方」には多様な価値が含まれ、「よりよい」には個人によってさまざまな要素、捉え方があります。そのため、問いづくりの手法を用いて、多面的・多角的に「よりよい生き方」について考えました。

【問いづくりの様子】

本時では導入後、「いつでも弱い自分に負けない強い自分でいなくてはいけないのか」と課題を提示しました。その後、範読を行い、課題を意識して物語をもとに問いづくりをします。

子どもたちは、エックスチャートやウェビングマップを使って「自分の問い」「心が動いたこと（感想）」という視点から、意見整理を行いました。

この班（図1）では、自分たちの感想と問いを関連させ、最終的には、「二十何種類の職を転々としているのに、なぜここまで挫（くじ）けずに続けられたのだろう」という問いをつくり出しました。

この問いづくりでは、互いに意見が可視化されていることで、班のメンバーの意見を関連づけたり、つなげたりして問いをつくる姿が見られました。

図1

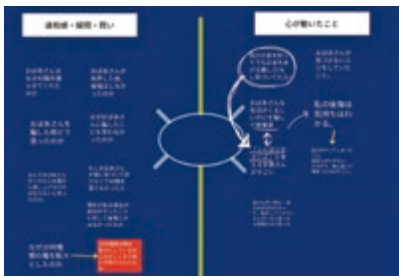
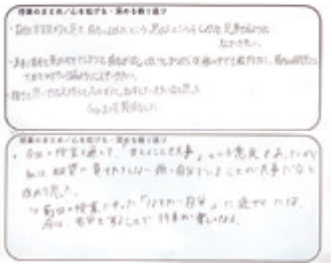


図2

図3



【シンキングツールを生かした解決】

問いを選び終えた後、それぞれの班で問いの解決を行いました。

問いの解決には、シンキングツールを用います。この時は、クラゲチャートやピラミッドチャートを用いている班が多くありました。

互いに意見を出し合いながら、次々と書き込みをしていくことで、論点が明らかになっていました。そして、班としての意見をまとめていました。

図2の班では、「後から後悔した」ことに焦点化し話し合っていました。

S1：自分に精一杯で、その時の気持ちだけで行動したから後悔した。

S2：お婆さんのことも考えず。

S1：この意見ね。それをお婆さんは分かっていた。それで励ましてくれた。

S3：お婆さんが苦しんでも？

S4：本当に足袋が欲しかったんだろうね。おばあさんだからそれが分かるんだよ。ここつなげるね。

S2：何でお婆さんは、そこまでするの？

S4：今がつらくても頑張ってほしいんだよ。だから「踏ん張りなさいよ」

S1：そう思うと、その言葉を受けて「私」は頑張ったんだから、お婆さんの思いをその後に生かしているよね。

S4：後悔してるけど、感謝してるよ。

この班では、可視化された互いの考えを見合いながら考えを追加したり、ペンでつなぎ加筆したりしていました。自分たちの問いについて、全員で同じものを共有し、可視化したことで、さらに話し合いが深まりました。

【子どもたちの振り返り】

問いの解決後、互いにその内容を共有し、課題に対して自分の考えを書きながら振り返りを行いました。（図3）

子どもたちは、それぞれの考えに触れ、「向上心」「思いやり」「正直」「相互理解、寛容」など、自分にはなかった価値的視点を取り入れながら「よりよく生きる」ことについて多面的に捉え、考えることができました。

おわりに～実践から見えたもの～

①価値を多面的に捉えるよさ

問いづくりを通じて、道徳的価値を多面的に捉えることができました。問いを深く読み解くことで、子どもたちは「よりよく生きる」という価値に自分なりの考えを持ちました。また、この思考のプロセスによって、個々の価値観の多様性に気付き、他者の考えに共感するきっかけになりました。

②ICTだから生まれる対話

シンキングツールの活用により思考が可視化され、意見交換が活発になりました。共有ノートによって、常に他者の意見に触れることができ、自分の考えを見直し続ける姿がありました。

実践からICTと生徒による問いづくり、道徳の融合は、子どもたちの豊かな学びにつながると感じました。

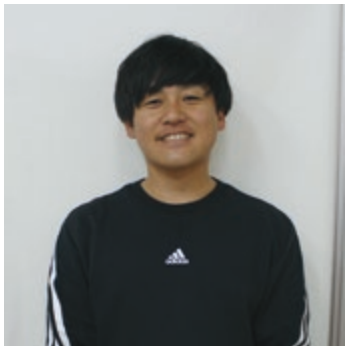
これからも、生徒自ら問いを追求し、多様な価値観に触れることができるような授業を目指していきます。

（わたなべ　りょうすけ）

道徳授業 私の実践

「自己を見つめる」児童の育成

和歌山県高野町立
高野山小学校教諭
南　善基



はじめに

私が道徳科の授業で特に大切にしていることは、「自己を見つめる」ことです。「自己を見つめる」とは、道徳的価値を「自分のこと」として感じたり、考えたりすることです。これまでの自分の経験、その時の感じ方や考え方と照らし合わせながら考えることで、さらに考えを深めることができると考えます。

教師と児童が共に探究する授業

私は、いつも、「教師と児童が共に解を探る」という立ち位置で授業をしています。決められた正解を探すような授業では、児童があれこれと話し合い、さまざまな価値観が飛び交う議論にはなりません。まずは、児童の意見を必ず受け止めることに取り組んでいます。「受け止める」とは、「どんな意見でも正しい」と児童に伝えるのではなく、「しっかりと聞いているよ」と感じさせることです。

例えば、「なるほど、そう思ったんだね」（意見を認める言葉）「どうしてそう思ったの？」（さらに深く考えさせる問い）「〇〇さんの意見についてどう思うかな？」（児童同士の対話を促すような問い）などの問い返しを活用し、ファシリテーターとしての意識を持つことを心がけています。

先に教師がファシリテーターとしての姿を見せ、他者の意見を受け止めるモデルとなって示します。すると、児童一人一人がファシリテーターとして話し合いに前向きになり、友達の異なった意見を受け止めることができるようになります。そうすることで、共に解を探究する仲間意識が芽生えていきます。

自己投影させる発問づくり

最近は、ねらいの道徳的価値へ一直線に向かう中心発問が多く見られるように感じています。例えば、テーマを直接的に問うもので、「自由と自分勝手の違いとは？」などの発問です。このようなテーマ発問だけでは深い学びになりにくいと思います。児童がそれぞれ自分の意見を主張し合うのみとなり、一つの意見を深めたり、異なる意見を受け止めたりすることができなくなってしまいます。

児童が教材文の場面をしっかりと「自分のこと」として考えられるようにするためには、児童を登場人物へ深く自己投影させることが効果的です。自己投影させるためには、中心人物の心情を問います。

例えば、「〇〇は、どのようなことを思いながら涙を流しているのでしょう」「△△は、港へ走っているとき、どんなことを考えていたのでしょう」など、まるでその場面に自分が立って

いるかのように語り合えることを目指し、行動と結び付けて問います。すると、教材内の出来事が「自分のこと」になり、真剣に向き合い、本音で話すようになってきます。

教材の中心場面で「自己投影させる中心発問」の後、「ねらいの道徳的価値へ迫るテーマ発問」を問います。「自分のこと」として考え、話し合えるからこそ、児童独自の言葉で表現できるようになります。

『移動教室の夜』という教材において「自由と責任について何を学びましたか」というテーマ発問での一般的な意見としては、「迷惑をかけてはいけない」「楽しむことが大事」などが予想されます。しかし、「自分のこと」としてしっかり考えると「自由とは、自分だけのものではない。周りの人の自由も考える」「自由がよりよいものになるためには、助け合いの心や親切な心が必要」「最後まで楽しめるのかを考えて、行動に移す」など、まるで児童たちが今体験してきたかのように語ることができるのです。教材という共通で限定された場面に自己投影し、疑似体験することが「自分のこと」として考える深い学びにつながります。

広げる、深めるペアトーク

一時間で四、五回はペアで話し合う機会を設けています。目的は、意見をたくさん出し合う「考えを広げる話し合い」と、意見をまとめる「考えを深める話し合い」の二種類の意識を持って取り組むためです。自分一人で考える時間を長く取るよりも、友達と意見を交流させながら、多様な価値観に触れることで、自分の意見に自信を持ったり、新たな意見を持つことができたりします。

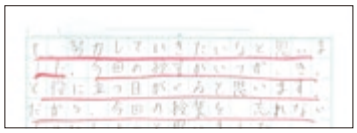
児童のアンケートには、「友達と交流することで、自分の意見が持てるし、自信を持って意見を話せるようになった」「自分とは違う意見をそんな意見もあるんだと思えるようになった」「思いつかないときでも友達と協力して考えられる」「自分の意見を友達に聞いてもらえることがうれしい」「自分たちの考えを出して終わりではなく、さらにみんなで考えて深められるのがいいと思う」「みんなで悩んで解決していく授業が面白い」などの回答がありました。

これらのことから、中心発問時には、書く時間を設定せずに、すぐにペアトークにつなげるようにしています。話し合いが活発になることで、自分の価値観を話すことが増え、次第に「自分のこと」という感覚になっていくのだと思います。

児童と学びをつなぐ終末の感想

授業の締めくくりとして必ず感想を書く機会を設定しています。それは、授業で何を感じたか、何を学んだのかを明確に持ってほしいからです。さらに、その感想を読むことで、教師の授業改善につながります。

児童にどんなことを意識して感想を書いているのかアンケートを取ると、「学んだことから自分の経験につなげたこと」「学んだことをこれからどう生かしていくか」「登場人物の立場に立ったり、気持ちになったりしたこと」「自分の直さないといけないところや自分にできること」「自分の周りの人との関わり方」「学んで忘れたくないことや見返したいこと」「授業で考えを深めて楽しいと感じたところ」などが挙げられました。書くことで児童が自分と学びがつながることを実感でき、染み込んでいくように感じています。



おわりに

私は日頃から「語れる児童になってほしい」と思っています。人が語っているところは、とてもきらきらしていて、聞いている私もとても楽しいし、うれしい気持ちになります。語る児童が増えると授業全体がとても楽しく、面白いものになります。

自己を見つめ、そして、本音で語り合い、自分たちのよりよい生き方についての納得解を探究する道徳科授業を常に実現させていきたいです。

（みなみ　よしき）

SDGs×道徳

連載 第16回

微力ではあるが無力ではないと信じて

佐藤（さとう）　友莉菜（ゆりな）

「大学生の時にウガンダで養鶏始めたんだよね」と言うと驚かれることが多い。だが、そのきっかけは「大切な家族の笑顔を守りたい」というみんなが持っているような想いだった。

国際協力の道へ

幼い頃から募金箱を見ると寄付せずにはいられない子どもだったと母から聞いた。町中にはってあるユニセフのポスターやメディアで見る途上国の子どもたちの様子が、なぜか特に気になっていたように思う。

振り返ると、次の三つが主なきっかけとなり、現在の活動に至ったと感じる。一つ目は小学校の授業で途上国について学んだこと。漠然と「なぜ同じ世界でこんな目に遭っている人がいるのだろう」と疑問に思った。二つ目は子どもが好きで将来は保育士になりたいと思っていた時期があったこと。三つ目は高校一年生の時にアメリカのウィスコンシン州へ約一年間留学したこと。日本と異なる教育を受けたことで他国の教育に興味を持った。高校卒業後は途上国教育を専門に学びたいと思い、大学に進学した。そして大学二年生の時、現地で自分にできることを見つけるため、休学してウガンダ共和国の児童養護施設「Kiyumbakimu Children's Village（KCV）」へ三か月間のインターンシップに出かけた。

訪問当時、KCVには約二十人の子どもたちと寮母のリタ、用務員のコスマが暮らしていた。私はKCVで暮らしながら活動することになった。

私が現地で行っていた活動は主に二つある。一つはKCVで暮らす子どもたちの世話だ。施設のある村には水道、電気、ガスは通っていなかった。*そのため、片道二十分の水くみから始まり、薪（まき）集めや家畜の餌集め（自然に生えている特定の草などが餌になる）、全て手作業で行う全員分の洗濯など、日本で行う家事に比べるとはるかに時間も体力も必要となる。もう一つは現地の小学校や保育園での授業。ウガンダは基本的に全ての授業が英語で行われる。

（＊　KCVには小さなソーラーパネルがあり、スマートフォンなどを充電するほどの電気はあった。）

当時KCVで最年少だった2歳の女の子と佐藤さん

ウガンダの子どもたちと暮らして驚いたのは、彼らの生活力の高さである。施設で暮らす子どもだけでなく、村の子どもたちも当たり前のように家事を担っていた。また、何かが壊れてしまっても、直し

てできる限り使おうとする姿勢にも感心させられた。

ＫＣＶの運営は現地のＮＧＯ団体が行っていたが、資金は十分とは言えなかった。子どもたちはチャイルド・スポンサーシップによる支援を受けたり、ボランティアから個人的な支援を受けたりすることも多かった。

ウガンダでの私の家はＫＣＶであり、そこに暮らす子どもたちは私にとって家族だった。だから、十分な生活資金がなく食事は一日一回、学費が未納という理由で学校へ送り出しても帰されてしまう、薬代や交通費がないため診察料無料の病院へも行くことができないという状況の子どもたちと共にいることが苦しかった。なんとかしたいと強く思い、ＫＣＶに直接収入が入る仕組みを作りたいと考えた。

養鶏事業の創業

レンガを運び鶏舎の建築を手伝う子どもたち

養鶏を始めたきっかけは、村を歩いているときに放し飼いになっている鶏をよく見かけたことだった。小屋を作って管理できるほどの資金がない村の住民は、ほぼ放し飼い状態で鶏を飼育していた。そのため鶏や卵を盗まれてしまうのもよくあることだった。そこで、鶏舎を建ててきちんと管理すれば、安定した収入が得られるのではないかと考えた。村のインフラの状況を踏まえても実現可能であり、鶏糞を農作物の肥料にすることもできる。

初めは滞在中に自分のお小遣いで小さな鶏舎を建築することから始めた。そこで鶏を飼育し始めたものの、帰国時には少しの間の餌代を置いてくることしかできず、持続させるには規模が小さすぎた。

帰国後は大学の授業やアルバイトなど日々の生活に追われたが、養鶏事業に対する悩みは深まるばかりだった。規模を大きくしなければならないのは明白だが、自分にできることは決して多くない。やる意味はあるのだろうか、そもそもこのやり方でよいのだろうかと何度も考えた。しかし、まずは行動を起こし、変化が必要であればその都度少しずつ変えていけばいいと自分自身を励ました。

養鶏のことをきちんと知ろうと日本の養鶏場を訪問したり、資金集めのために仲間が必要だと思い、学生団体を創設したりすることから始めた。そこから約半年で事業を開始する準備を整え、初めての訪問から一年後、学生団体の仲間と共に再びウガンダへ渡航し、改めて鶏舎の建築からスタートした。

フルーツ王プロジェクトの始動

現在は「ウガンダフルーツ王プロジェクト」と名を変えて、養鶏事業時代の仲間主導の元、新たな取り組みが始まっている。

養鶏を開始して二年間、試行錯誤はしてみたものの、このまま養鶏を続けていくのは難しいのではないかと感じていた。大きな課題となったのは生き物が相手だったことだ。餌や薬、獣医による診察などが待ったなしで必要になるが、それらが手に入る都市まではＫＣＶから片道数時間かかる。そんな中、新型コロナウイルスによるウガンダ国内のロックダウンで物流は止まり、物価が高騰した。そこで思い切って路線を変更することにしたのだ。

生き物でないもの、天候に左右されにくく、ライフラインが整っていないＫＣＶで扱えるものという点で、ジャム・ドライフルーツ・はちみつ事業を展開し始めた。生産から加工までをＫＣＶで行い、ウガンダ国内での販売のみならず日本への輸出も目指している。目標はＫＣＶの経済的自立に留まらず、ウガンダ国内の雇用創出だ。仕事がなく困っている多くの人の一助になりたいと考えている。

「自分にできる国際協力って何だろう？」その答えを探してウガンダと出会ってから、二〇二三年で七年になった。今も答えは見つかっておらず、相変わらず悩み葛藤を続けながらＫＣＶと関わっている。これからもトライ＆エラーを繰り返しながら、自分の歩幅で少しずつ前に進んでいきたいと思う。そして、子どもたちの笑顔を守りたい、大切にしたいと思って始めたことは常に心に留めておきたい。

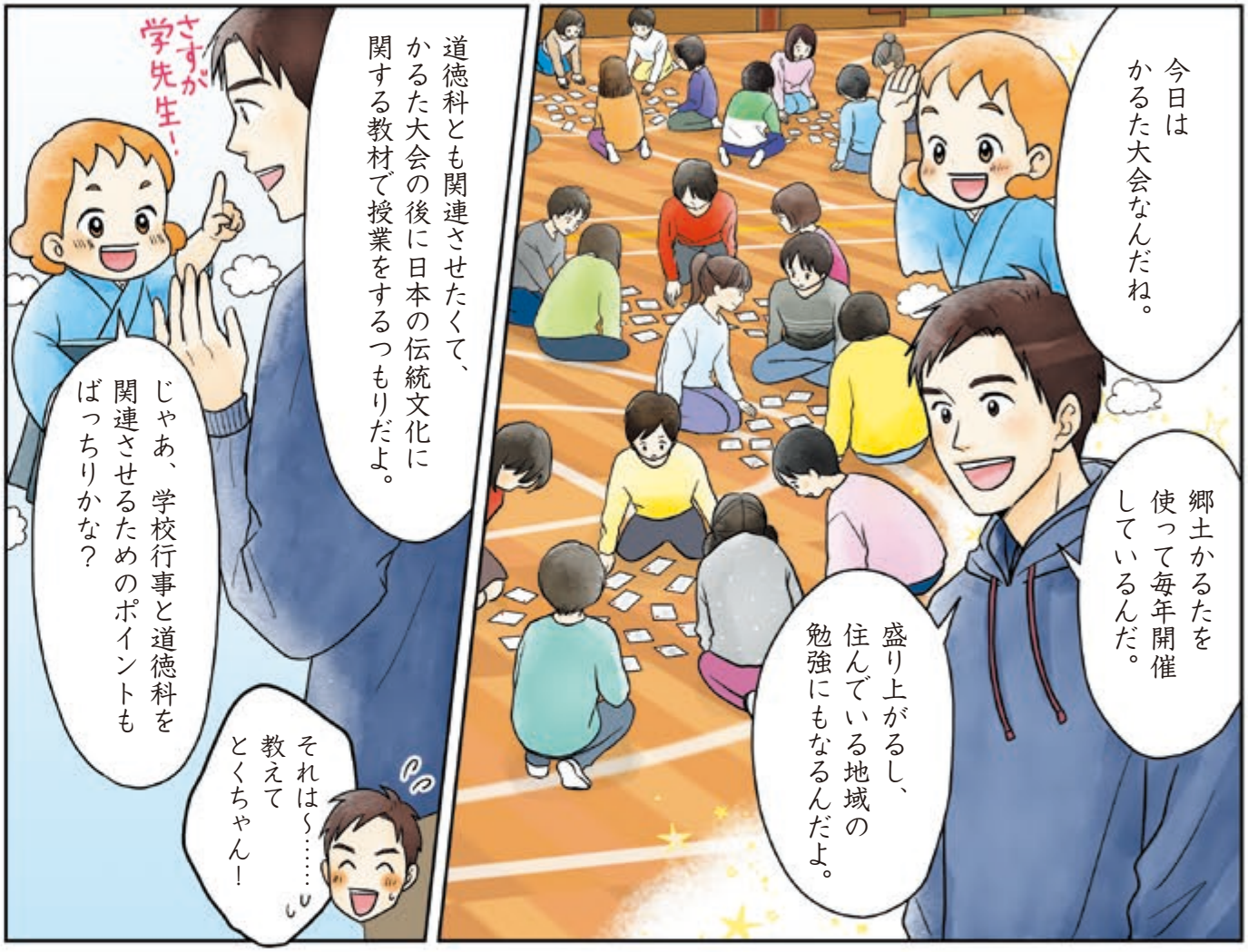
※　佐藤さんのウガンダでの活動についてのインタビューは、『新・中学生の道徳　明日への扉　3』（学研）に教材として掲載しています。

どうなるこれからの道徳授業

連載22回　学校行事との連携編

監修・廣瀬仁郎　法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

とくちゃん　学先生



響き合いを大切にする
もちろん、道徳科で考えたことが修学旅行での行動に表れるのはいいことだよ。
でも、事前指導としてマナーを守ることを促すという発想だと、道徳科の授業が修学旅行を成功させるための手段になってしまうね。
学校行事と道徳科がお互いに関連して、響き合う関係を目指そう。
共通の体験活動を生かす
響き合うってことは、学校行事の体験を生かした道徳科の授業をすることも大事だよね。
どうすればいいんだろう。
あ！
学先生おてつき!!
学校行事の特徴は、学年や学校共通の体験として共有できることだよ。
その体験をもとに問題意識を高めて、道徳科で考えを深めてみよう。
例えば、修学旅行で一人一人が学級や学校の一員として活動した経験をもとに、自分の役割と責任について自覚を深めた体験を道徳科で振り返ることができるよ。
かるた大会を通して子どもたちが感じたことを振り返りながら授業をすればいいのか。
郷土かるたに描かれた地域の特産に興味を持った子がいるだろうな。
○○って何だろう？
はいっ
大会まで一生懸命練習していた子もいたな。
かるたの作法を振り返って、礼儀について考えるのもいいかも。
あとは……。

道徳ジャーナル120号 令和6年2月発行

発行所 株式会社Gakken **発行人** 甲原 洋／**編集人** 麻生征宏

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL（03）6431-1565（編集） **それ以外のことは**…TEL（03）6431-1151（販売）

「学研 学校教育ネット」 https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/ ●『道徳ジャーナル』のPDF版はWEBページから。

9300009232

＊LINE 公式アカウントのお知らせ＊

（株）Gakken おんたま先生

体育・保健体育や道徳、特別支援教育、ICT 教育などの最新情報や、オンラインセミナーの開催情報を配信しています。

友達募集中！

◀QR コードをスキャンすると LINE の友達に追加されます。